

五大陸 8 万キロの旅あれこれ

オセアニアとシドニー

ここに時代にはオセアニアだけ訪れるツアーはなかった筈である。オーストラリアの他の各都市や、ニュージーランド然り、やはりシドニーだけが別格であった。当時、建てられて年月のまだ浅いオペラハウスは、白い貝殻を縦に並べたようなどちらかというと突飛で目立つ建物であり、周りの景観とマッチしないと評判が良くないと聞かされた気がする。郊外に出てコアラを見にいった気がするが今は記憶がない。

アジアの代表はバンコクとシンガポール

当時、東南アジアの国々の中では、植民地化されていないタイとシンガポール(1965年独立)の2国であり、今回の旅程に入っていない台湾や香港(英国領)、マカオ(ポルトガル領)がその代表である。

日程上それ以上観光地について付け加えることは無理であり、バンコクからコペンハーゲンに飛んだことは、このルートを持っているのはスカンジナビア航空であり、今回の旅行では手配上のその他のメリットもあり、途中寄港したタシュケントも滞在は無理であったが、お客様は恐らくヒマラヤ上空を飛んだことで満足された筈である。8000m以上の13座(今は14座に変更)について何冊もの本も読んでいる私はもちろんであるが。なお、山は数は「座」と数える。

ヨーロッパ(ロンドン、ローマ、パリ)

コペンハーゲンは日程の関係と航空機と手配上の便宜とによる乗換のための宿泊で、観光はしていない。その他の3カ国と3都市いずれも外せない国々であり大都市である。

アフリカ(アビジャンとダカール)

当時は、エジプトを核としてアフリカだけを旅行する時代でなかった。時代が下がれば、マグレブ3国(モロッコ、アルジェリア、チュニジア。マグレブとはいアラビア語で「西」の意)の歴史的遺跡巡りやタンザニアでの車サファリツアーになるのであるが、旅程作成者は、次の南米に繋げることを考えて、エールフランスのアビジャン路線、ダカールからリオデジャネイロのルフトハンザドイツ航空を選んだのではと私は推測する。ダカールは16世紀末から西欧列強の争奪の商用的・軍事的な重要港であり、奴隷売買の取引都市でもあった。パリ・ダカ・ラリーは関係ない。

南米(リオ・デ・ジャネイロとブエノスアイレス)

文句なしの南米を代表するブラジルとアルゼンチンの2国であり2都市である。リオ・デ・ジャネイロはポルトガル語で「1月の川」の意で、ブエノス・アイレスはスペイン語で「順風」。この語源となる Santa Maria del Buenos Aires (順風のサンタマリア=航海の守護神)から命名された。

ブラジルはポルトガルに先駆けてスペインが植民したが、1494年に両国が協議して取り決めた「トルデシリャス条約」により、ブラジルはポルトガル領となり、同国語になった経緯がある。

中米(メキシコ)と北米(アメリカ合衆国)

メキシコは南米のアンデス文明と共に取り上げられているマヤ文明の中心地であるので、アメリカ合衆国に近いところにあることから、アンデス文明に先駆けて取り上げられた観光地でもある。何しろ、メキシコはそのかなりの土地をアメリカ合衆国に割譲したり、戦争(米墨戦争)を仕掛けられて奪われた歴史的背景もある。アメリカ合衆国のかかなりの都市もスペイン語に由来している。アメリカ合衆国では、旅程の長さの関係から東のニューヨークと西のロサンゼルスだけで十分でしょう。カナダの都市も然り。私の旅程表ではハワイの記述があいまいであるが、宿泊はなかったと思う。